

## 上巻目次

揺籃のころ——平和利用のスタート	一
“最初”の人たち	三
飛び出した原子力炉予算　電力経済研の“勉強”	学界の足ぶ
み　最初の平和利用論―武谷論文	
“死の灰”——第五福竜丸事件	一六
三度目の被災　“日本人は原子力アレルギー”	許容量をめぐ
って	
その前史	三三
ラジオ・アイソトープの輸入再開　戦前の研究	
てんやわんやのスタート	三〇
とにかく体制作り　海外調査団の苦勞　研究の方針打ち出す	
三原則の誕生	三六

目次	
1 学術会議の平和声明	三六
『寝耳に水』の学界	公開、民主、自主
公開の原則の意味	
2 原子力三法の成立	四〇
勉強した『四人のサムライ』	実現しなかった行政委員会
3 日米協定をめぐる論争	四六
米、濃縮ウランの提供申入れ	アメリカの改正原子力法
機密保護法が必要か	協定の成立
原子力委員会の誕生	五三
初代委員の人選	『五年後に原子力発電を』
湯川さんの辞任	
研究開発の体制を築く	六四
1 日本原子力研究所生れる	六四
研究炉計画固まる	財団法人の設立
敷地選考の二転、三転	
東海村に原子力センター	研究炉の建設すすむ
2 原子燃料公社の設立	六八
産業界の体制固まる	七二
1 日本原子力産業会議の発足	七二
三つの流れ	ホプキンスの来日
正力さんの提唱	第一回ア
イソトープ会議ひらく	産業使節団と原子動力シンポジウム
日米合同会議とIAEA参加	
2 原子力産業五グループの誕生	七六
グループの結成	技術提携と研究所の整備
赤字白書	
原子力発電の早期開発へ	一〇三
1 コールダホール型の導入	一〇三
ヒントン卿の来日	正力―河野論争
日本原子力発電(株)の設立	剛構造と柔構造
安全性の公聴会開かれる	安全性論争が残したもの
地元茨城県の動き	
2 損害賠償制度の確立	一三三
英国から『免責』の申入れ	原産に賠償法委員会
法の根本思想を変える	法の成立―責任集中と無過失責任
摸索の時代――スローダウンの波	一三九
世界的なスローダウン	一三九
1 エネルギーの主流は石油へ	一三三

2	原子力発電計画の建て直し	一三五
3	産業界、学界が積極意見	一四〇
4	前期十年に百万キロワット	一四三
5	新長期計画の誕生	一四五
6	スローダウンに「活」——日米原子動力会議	一四九
	原研の混迷深まる	一五〇
1	待遇改善でスト、原子の火消える	一五五
2	原研首脳陣交代へ	一五九
3	GE社、運転停止を指令	一六一
4	「原研のあり方」が論議される	一六九
5	理事長に丹羽氏登場	一七〇
6	平均質炉消える——「国産動力炉」に活路	一七二
	「金の卵」を生む放射線化学	一七六
1	産業界から体制づくり	一七六
2	原研に中央研究機構設置へ	一八〇
3	高崎研究所が発足	一八五

4	研究成果あがる——実用にもう一步	一八八
5	日仏協力の前進	一九一
6	食品照射と殺菌実用化へ	一九四
	アイソトープ利用の発展	一九九
1	「センター」構想の芽生え	一九九
2	原産の提唱——全国一貫体制	二〇一
3	科技厅、放同協、原研の三すくみ	二〇四
4	原研に事業部設置で結着	二〇六
5	国産アイソトープの生産始まる	二二三
6	目ざましい工業利用の伸び	二三四
7	国際色増すアイソトープ会議	二三八
	「原子力都市」へ——東海村の地帯整備	二三三
1	中曽根委員長の都市構想	二三三
2	原産、地元の協力で青写真	二三六
3	整備は現行法のワク内	二三六

4	五カ年計画で実施きまる……………	二二三
5	地元の悲願、水戸射爆場の返還……………	二二七

原子力船時代への胎動……………

1	原子力船研究、事始め……………	二四三
2	三千四百六十トンの第一船構想……………	二四四
3	専門部会は三船種、五船型を答申……………	二四七
4	六千三百五十トン、海洋観測船にかたまる……………	二四九
5	日本原子力船開発事業団の誕生……………	二五一
6	メーカーの入札総辞退で計画遅延……………	二五四
7	八千トン、特殊貨物船に変更……………	二五〇
8	母港、横浜から下北へ……………	二五九
9	公募で「むつ」と命名……………	二六二
10	第二船、日独共同研究へ……………	二六五
11	原子力船の相互寄港時代……………	二六九

初の原子力発電所——東海発電所誕生……………

1	難工事、五百メートル沖から取水……………	二七一
2	材料、設計に問題続出……………	二七九
3	ついに臨界——四十年五月四日……………	二八二
4	待望の営業運転に入る……………	二八六
5	二号炉へ貴重な経験……………	二八八
原子力発電ふたたび上げ潮へ……………		
1	軽水炉の経済性にめやす……………	二九一
2	原産、原子力発電促進を要望……………	二九四
3	総合エネルギー部会、原子力に高い評価……………	二九七
4	電力三社、一号炉の準備に入る……………	三〇〇
東京電力、福島に敷地を確保 関西電力、原電と共同で敷地確保 中部電力は芦浜から浜岡へ……………		
5	第三回ジュネーブ会議、経済性が焦点……………	三〇〇

下巻―新時代へ向って―目次

軽水炉の建設と長期予測	三
動力炉開発のスタート	六
核燃料政策の前進	七
産業共存への努力―立地環境問題	九
再処理とプルトニウム	九
ウラン資源の確保	一五
濃縮ウランの調達	一五
原子炉多目的利用の気運	一六
核拡散防止条約の調印	一八
地上の太陽づくり―核融合	二七
展望―これからの原子力	三三
別冊―原子力年表（一九三四―一九七〇年）	